

中年期における文化的自己観とソーシャル・サポート要請の関係について — 感情に着目して —

生方 敦子・今城 周造

Cultural construal of self and social support seeking in middle age

Atsuko UBUKATA and Shuzo IMAJO

Previous research has suggested that especially middle-aged Japanese people are less likely to seek social support compared to Americans. Japanese emphasize a construal of self that is interdependent with others. By contrast, Americans have a strong belief in the independence of the self. Such cultural construal of the self shapes the nature of psychological processes, such as emotions. It has also been suggested that people who receive help feel more indebted, because they are obligated to reciprocate the favors that are received. We hypothesized that engaged negative emotions that are involved in the interdependent self construal, would induce indebtedness, and restrain people from social support seeking. A questionnaire survey was conducted with middle-aged people in Japan ($N = 385$: Mean age, 48 years, $SD = 5.39$). Results confirmed that social support seeking was affected by the cultural self construal through negative emotions: (1) The more interdependent a person's self construal was, the more engaged were negative emotions. (2) The more engaged a person's negative emotions were, higher was indebtedness after receiving help on issues related to children. (3) The more indebted a person was, less was the tendency to seek social support for issues related to children.

Key words : *cultural construal of self* (文化的自己観), *social support seeking* (ソーシャル・サポート要請)
engaged negative emotion (関与的否定感情), *interdependent construal of self* (相互協調的自己観)
indebtedness (心理的負債感)

問題と目的

文化差とソーシャル・サポート

ソーシャル・サポートと人の心身の健康との関連はさまざまな研究で明らかになっている (Caplan, 1974 近藤他訳 1979; Cassel, 1974; Cobb, 1976)。

しかし、日本におけるソーシャル・サポート要請傾向は、アメリカに比べて低いことが示されており (橋本ら, 2007; Kim *et al.*, 2008; Taylor *et al.*, 2004)、サポート要請には文化差があると考えられる。これらの実証研究では、日本などのアジア文化圏では、他者との関係を懸念することや調和を重んじることなどが援助要請における抑制要因

と関連していることを示唆している。また、世代別の援助要請の差という観点で見ると、日本においては、若い年代に比べ、中高年は、自分の問題を周囲の人に相談しない傾向があることが指摘されている (高橋, 2000)。

危機期の中年期とソーシャル・サポート

今日の長寿化や少子化にともなうライフサイクルの変化や生き方の多様化などの社会の変化によって、中年期以降の人生をどう生きるかが関心事となっている。Jung (1916/1946 高橋訳 1977) は、人間の一生を太陽の日内変化にたとえ、発達の根本的变化は、「人生の正午」である40歳に始まるとした。人間は、中年においてその頂点に達

し、人生の後半においては、下降、すなわち死への準備をいかに完成してゆくかが大きな主題となるとした。また、Erikson (1982 村瀬他訳 1989) は、人格発達の過程を8つの段階で表し、各段階における課題を提示し、中年期は、「生殖性」が課題であるとしている。「生殖性」の概念は、自分の子供を生み育てることだけではなく、広く、仕事の技術を伝授することを通じて、次世代を育成したり、新しい思想や作品、物を生み出すという育成的・想像的・生産的な関わり方を包含するとしている。そして「生殖性」の課題が達成されなかった場合は、自己満足や自分の保身ばかりを考えるような「停滞」に陥るとして中年期の発達の危機を考えている。また、岡本 (2005) は、危機期と呼ばれる中年期には、身体上、職業上、家族のライフサイクル上の変化などで自己内外の否定的体験に直面するため、それらへの不適応の結果、うつ病、神経症などの心の障害が発生しやすいことを指摘している。さらに、岡本 (1996) は、中年期の発達において、重要な問題として「他者の存在に責任を持つ」ことを挙げ、家庭において、子供や配偶者、老親などの重要な他者にエネルギーを注ぎ込むことは、アイデンティティの再確立に不可欠の要件であると主張している。これは、Erikson (1982 村瀬他訳 1989) が提示した中年期の課題である「生殖性」にも通じている。中年期が他者を育てることによって成人として成長・発達していくものとするれば、他者の存在への責任とは、中年期にとって乗り越えなくてはならない最も重大な課題と言えるだろう。

このように人生の危機期を迎える中年期をうまく乗り越えられれば、アイデンティティの再確立を果たし、充実した老年期を迎える準備ができるが、実際には、一人でなし得るには困難が多く、周囲からの心理的支援、つまりソーシャル・サポートの果たす役割が非常に重要になってくると考えられる。しかしながら、サポートニーズが高いはずの中年期の人々が、現実にはサポート要請をしない傾向があるというギャップが存在しているのである。国によりサポート要請行動に違いが生じる背景には、文化社会的側面による影響が考えられるが、とりわけ中高年はその影響を強く受けている可能性がある。

文化的自己観

北山 (2007) は文化と心の相互作用を解明するに当たっては、ある特定の文化の意味構造や習慣などが、その文化で長い年月をかけて育まれてきた自己の概念と深く関連していることを理解する必要があると指摘している。人は、所属する集団の文化に適応しようとし、その過程において文化資源を内面化させ、人の主体のありようを形成していく。そのように形成された自己観をKitayama & Markus (1991) は文化的自己観と呼んだ。文化的自己観は、ある文化において歴史的に作り出され、暗黙の内に共有されている人の主体についての通念のことであり、「私はこういうものだ」という認識の他に、物事に意味を与え、考え、感じ、行動する際の準拠枠を提供するとした。また、自己観が意味や行動に及ぼす機能に系統的な文化差があるとし、自己観はそこに暮らす人々の行動、認知、感情を強く規定する影響力を持つものであると主張している。さらに、文化的に共有された自己観の性質を体系的に分析するために、自己観を北米中産階級で優勢な「相互独立的自己観」と日本などのアジアで前提とされる「相互協調的自己観」の2つに分類することが有効であると主張した。前者は、他者から独立して独自性を主張するもので、後者は個人がさまざまな人間関係の一部になることを重んじるものとされている。

北山・唐澤 (1995) は、特に日本における相互協調的自己観の形態的特性には、「役割志向性」と「情緒的態度」の2次元があると指摘している。日本人の役割志向は、Benedict (1967 長谷川訳 1967) が古典的名著『菊と刀』で指摘して以来、日本人の特性として取り上げられており、役割なしの自己、他者との関係なしの自己の存在を確認することが日本において難しいとされている(有光・菊池, 2009)。周りからの期待を自らの目標として内面化し、それに向かって努力することは、相互協調的主体としての自己の確認のための中心的要素であると指摘している(北山, 1998)。一方、他者への情緒的態度の重視は、「人の気持ちを察する」「その人の立場に立つ」などといったいわば、共感的態度を意味し、日本の子育ての中心的特徴としてその重要性が指摘されている(東, 1994)。また、役割志向と情緒的態度の重視は、日本における道徳律を構成していると主張し

ている(北山・唐澤, 1995)。日本人の道德律は、義理にしても人情にしても人間関係の様式の一般化であり、罪は、普遍的原理に対して定義されているわけではなく、むしろ、ある特定の関係性の中で、役割を果たさなかったり、情緒的態度をとれなかったりした結果として生じてくる「申し訳なさ」や「恥」に代表される状況依存的な感情であるとしている。

文化的自己観と感情

文化に適応する中で形成されていく自己観は、感情のプロセスにも大きな影響をもたらすと考えられる(北山・唐澤, 1995)。Kitayamaら(2006)は、他者との関係志向性に基づき、感情を4つのプロトタイプに分類した。第1は、自己の独立という課題の成功によって引き起こされる「誇り」「有頂天」「優越感」などの、自己を対人関係から脱関与させる「脱関与的肯定感情」、第2は、自他の相互協調という課題の成功によって起きる「親しみ」「尊敬」「共感」などの、自己を対人関係の中にさらに関与させる「関与的肯定感情」、第3は、自己の独立という課題の失敗によって引き起こされる「欲求不満」「ふてくされ」「怒り」などの、「脱関与的否定感情」、第4は、自他の相互協調という課題の失敗によって起きる「罪悪感」「負い目」「恥」などの「関与的否定感情」とした。日米の大学生を対象とした研究において、Kitayamaら(2006)は、日本人は関与的感情がより高いこと、また、Kitayamaら(2000)は、相互協調的自己観が優勢な日本人は、関与的肯定感情より、関与的否定感情の方が高いことを確認している。さらに、一言ら(2008)は、同様に日米の大学生を対象にした研究で、アメリカ人に比べ日本人は援助されることに伴って「すまなさ」「恥ずかしさ」のような否定的感情をより強く感じることを確認している。

心理的負債感

Greenberg(1980)は、被援助者が援助に対して必ずしも肯定的に反応しない背景には、被援助者が援助者に返報しなければならない義務感を負うからだとし、これを心理的負債感と呼び、心理的負債感の大きさは、被援助者の利益と援助者が支払ったコストによって決まるとする心理的負債モ

デルを提示した。

$$\text{Indebtedness} = V_1 \times \text{Benefit} + V_2 \times \text{Cost}$$

$$V_1 > V_2$$

V_1 は、自己の利益に与えられる重み

V_2 は他者のコストに与えられる重みを表す

相川(1984)は、日本人の大学生を対象とした心理的負債感の実証研究で、被援助者は、援助されると“心苦しき”のような感情を経験することを確認し、これは、被援助者の注意が、自分の被援助利益よりも援助者に負わせたコストに向いていることを示唆していると主張している。この“心苦しき”とは、先に述べた相互協調的自己観に優勢な関与的否定感情である「罪悪感」「負い目」「恥」と類似性があり、心理的負債感の概念は、サポート抑制を文化的文脈で探る上で非常に分かりやすいモデルと言える。

また、箱井・高木(1987)が日本人を対象に返済規範について世代間の比較研究を行った結果、若年者世代は援助を交換物と考え、Give-and-Takeと割り切っており、高年者世代は、援助されたらお返しをし、人の親切や好意を気にかけ、恩を重んじ、また、被害者に償おうとすることが示唆されるとしている。このような援助規範に対する意識の差は、中高年が長い時間をかけて、他者を意識する自己観を形成してきたことによってもたらされたものではないかと考えられる。

目的

本研究における目的は、中高年が抱える心理的課題について、文化的自己観がもたらす関与的否定感情のソーシャル・サポート要請への抑制効果を明らかにすることである。長期に渡り、関係志向性の高い相互協調的自己観を形成してきた中高年は、とりわけ、罪悪感、負い目、恥などの関与的否定感情が強く、その高い関与的否定感情が無意識下で被援助場面での心理的負債感の感受性を高めるため、ソーシャル・サポート要請を抑制してしまうと考えられる。

本研究の仮説は、以下の通りである。

仮説1：相互協調的自己観が高いほど、関与的否定感情が高いだろう。

仮説2：関与的否定感情が高いほど、被援助場面における心理的負債感が大きいだろう。

仮説3：心理的負債感が大きいほど、ソーシャル・サポート要請傾向は低くなるだろう。

また、本研究では、中高年のサポート要請の抑制を見る上で、中高年に特徴的な心理的課題を取り上げることとした。漠然とした「悩み」全般ではなく、具体的な中高年の課題を設定することで、より中高年に特化したサポート要請抑制の実態に迫ると共に、課題ごとのサポート要請のメカニズムに差異がないかを確認する。

方法

調査対象者および調査手続き

2012年6～7月に都内S女子大学心理学科に在学する1～2年の学生の保護者(男女)347名に質問紙を配布し、149名から回答を得た(回収率42.94%)。さらに、筆者の個人的な友人知人(男女)357名に質問紙を配布し294名から回答を得た(回収率82.35%)。それら二つのルートから得た合計443名のうち欠損値のある回答を除き、385名の回答について分析を行った。性別は、男性143名・女性241名・不明者1名、平均年齢は48.0歳($SD=5.39$)だった。また、婚姻の有無は、有り346名・無し38名・不明者1名、子供の有無は、有り329名・無し56名、職業の有無は、有り339名・無し46名、老親との同居は、有り100名・無し284名・不明者1名だった。

質問紙の配布は保護者へは、大学生を介した間接配布、回収は、一人分ごと返信用封筒による郵送で行った。筆者の個人的な友人知人へは、対面もしくは郵送で直接または間接配布し、回収は、一人分ごと返信用封筒による郵送もしくは封書による手渡しで行った。

調査依頼に際しては、回答は、本人の自由意思でいつでもやめることができること、苦痛を伴うような体験を書く必要はないこと、また、本調査は匿名での協力依頼であり、回答済み質問紙は個人が特定されないよう、全て一人分ごとに密封した無記名の封筒で回収することをフェイスシートで明記した。

調査項目

(1) フェイスシート

主なデモグラフィック変数として、年齢、性別、

婚姻についての回答の他、子供の有無、仕事の有無(パートタイム含む)、老親との同居の有無についても記述を求めた。それらの詳細は、調査対象者の説明で述べた通りである。

(2) 文化的自己観尺度

文化のもたらす自己観をどれくらい持っているかを測定するため、高田・大本・清家(1996)の文化的自己観尺度を用いて評定を求めた。「人が自分をどう思っているかを気にする」「常に自分自身の意見を持つようにしている」など計20項目について7段階評価(全くあてはまらない1ーぴったりあてはまる7)で測定した。

(3) 中年期の課題についてのソーシャル・サポート要請尺度

岡本(2002, 2005)が示した中年期に直面する「健康」「家族」「仕事」の3つの問題領域について、道具的サポートおよび情緒的サポートの要請行動をどれくらい取ろうとするかの尺度を作成した。30代後半以降経験した、もしくは今現在悩んでいることについて、それぞれ3つの問題領域の内、「健康上の悩み」は、①病気、②体力の衰えや老化、③更年期障害、「家族の悩み」は①子供のこと、②夫婦のこと、③老親のこと、「仕事上の悩み」は、①職場での役割変化、②能力の限界、などの具体的な悩みを設定し、その中から当てはまるものを選択させてサポート要請行動をどれくらい取ろうとするか回答を求めた。サポート要請行動は、坂田(1989)のコーピング尺度中の「被支持」と「協力・援助の依頼」を参考に、道具的サポートは、「身近な人に問題の解決に役立つ助言を求める」「同じような経験をした身近な人にどのように対処したか尋ねる」「問題を解決するために身近な人に援助してくれるよう頼む」の3項目、情緒的サポートは、「自分の気持ちを身近な人に分かってもらう」「自分のおかれた状況を身近な人に聞いてもらう」「身近な人から同情と理解を得る」の3項目、計6項目について7段階評価(全くあてはまらない1ーぴったりあてはまる7)で測定した。

(4) 脱関与・関与的感情尺度

文化のもたらす感情について、普段どれくらい感じているかその頻度を測定するため、Kitayamaら(1995)の感情尺度を用いて評定を求めた。尺度の活用には、Kitayamaら(2000)を参考

に項目を翻訳し、オリジナル尺度で掲示された計31項目の感情の中から感情と同定するには不適切と判断した「眠い」を削除し、「誇り」「ふれ合い」「嫉妬」「罪悪感」など、脱関与的肯定感情、関与的肯定感情、脱関与的否定感情、関与的否定感情の4つに分類される計30項目を採用した。また、オリジナル尺度は、7段階評価であったが、漠然とした感情の頻度を評定するには段階数が多すぎて回答しづらいだろうと判断し、5段階評価（全く感じない1-かなり頻繁に感じる5）とした。

(5) 被援助場面における心理的負債感尺度

サポートを要請する際に、普段心理的負債感をどれくらい感じるかを測定するため、相川・吉森(1995)の心理的負債感尺度を用いて評定を求めた。「私は、友達から世話になったら、友情を保つためにできるだけ早くそのお返しをする」「私は、人に何か物をもらうと、お返しのことが気になる」など、計18項目の被援助場面での心理的負債感について、6段階評価（全くあてはまらない1-ぴったりあてはまる6）で測定した。

(6) ソーシャル・サポートが役立つ事例について（自由記述）

中高年へのソーシャル・サポートの今後の活用を検討する上で、どのような悩みにどのようなサポートが役に立つのかを、中高年の生の声を通して調査するため、上記(3)で設定した悩みに関し

て、既に解決済みのものの中からサポートを受けたことが役立つ事例について自由記述を求めた。

結 果

文化的自己観尺度の因子分析

文化的自己観尺度の因子構造を確認するために、主因子法・Varimax回転による因子分析を行ったところ、12項目で構成される2つの因子が得られた（Table 1）。第1因子は、自己の独立的な特性を表す内容の項目で構成されているため、相互独立的自己観の因子とし、第2因子は、他者との関係志向性を表す内容の項目で構成されているため、相互協調的自己観の因子とした。因子寄与と寄与率は、相互独立的自己観が2.46と20.50、相互協調的自己観が1.99と16.61だった。また、Cronbachの α 係数は、相互独立的自己観が.78、相互協調的自己観が.72の値が得られ、内的整合性は許容範囲であった。

脱関与・関与的感情尺度の分類

感情を類似性に基づいて分類するため、全30項目に対してWard法による階層的クラスタ分析を行った（Figure 1）。その結果、4つのクラスターが示された。その中から、先行研究（Kitayama *et al.*, 1995）で示された代表的な感情項目だけを

Table 1 文化的自己観尺度の因子分析結果（主因子法による Varimax 回転後の因子負荷量）

No.	項 目	I	II
19.	いつも自信をもって発言し、行動している	.72	-.13
1.	常に自分自身の意見をもっようにしている	.67	.03
17.	自分の意見をいつもはっきり言う	.63	-.13
13.	自分が何をしたいのか常に分かっている	.61	.02
3.	一番最良の決断は、自分自身で考えたものであると思う	.52	-.07
7.	自分の周りの人が異なった考えをもっていても、自分の信じる場所を守り通す	.48	-.11
9.	たいていは、自分一人で物事の決断をする	.42	-.12
2.	人が自分をどう思っているかを気にする	-.06	.87
6.	相手は自分のことをどう評価しているかということから、他人の視線が気になる	-.13	.82
4.	何か行動をすること、結果を予測して不安になり、なかなか実行に移せないことがある	-.18	.44
8.	他人と接する時、自分と相手との間の地位や相対関係が気になる	-.07	.42
12.	人から好かれることは自分にとって大切である	.02	.38
	因子寄与	2.46	1.99
	寄与率	20.50	16.61

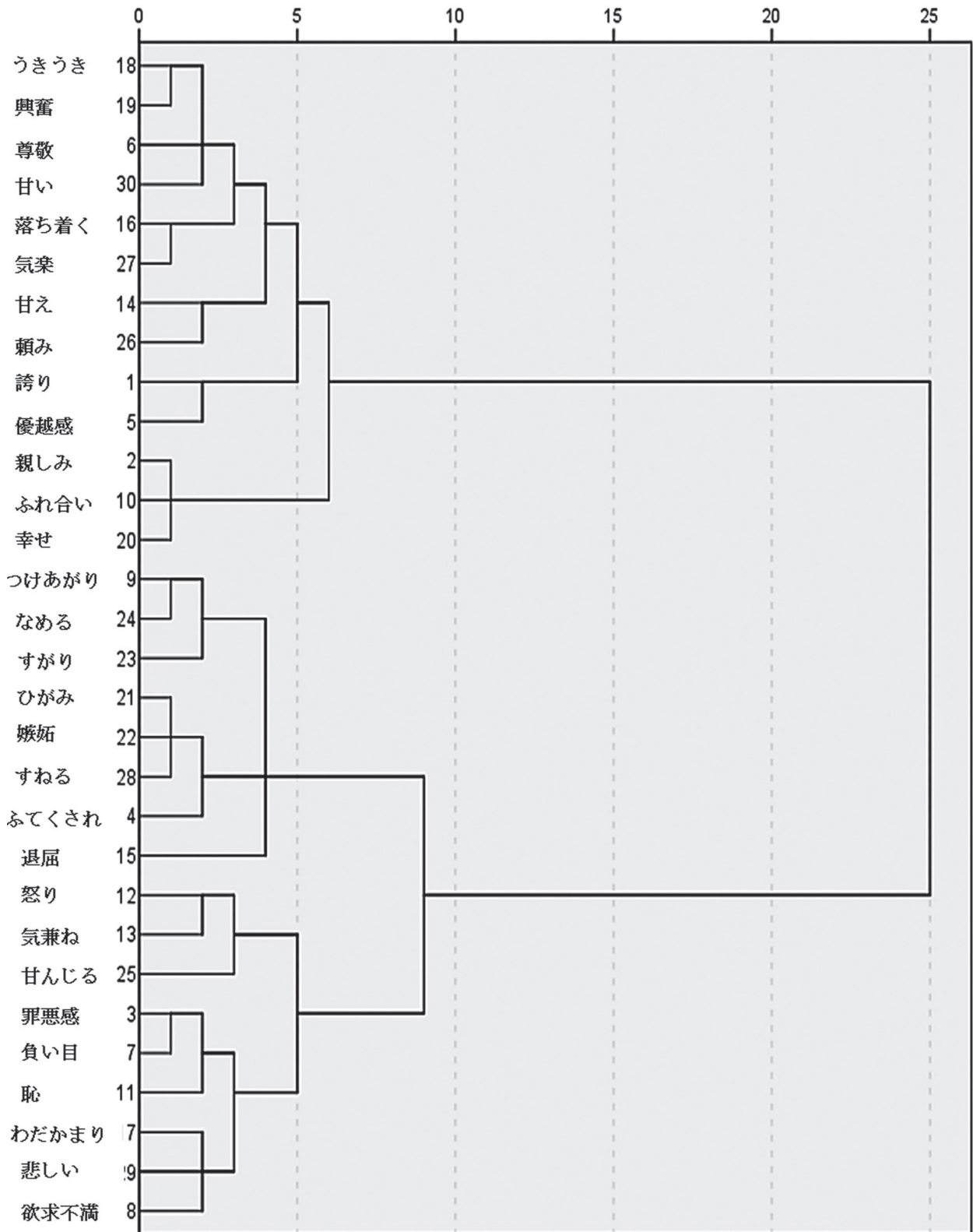


Figure 1 脱関与・関与的感情尺度のクラスター分析結果
(Ward法によるテンドログラム)

取り出し、脱関与的肯定感情（誇り、優越感）、関与的肯定感情（親しみ、ふれ合い、幸せ）、脱関与的否定感情（ひがみ、嫉妬、すねる、ふてくされ）、関与的否定感情（気兼ね、罪悪感、負い目、恥、わだかまり）の4つに分類した。なお、各感情のCronbachの α 係数は、脱関与的肯定感情が.59であったものの、関与的肯定感情は.71、脱関与的否定感情は.81、関与的否定感情は.75の値が得られ、内的整合性は許容範囲、あるいは十分であった。

分析対象の悩みの選定

健康・家族・仕事の3つの分野から回答数の多かった悩みを分析対象にすることとし、度数分布を調べた。その結果、健康では「体力の衰えや老化、 $N=204$ 」、家族では「子供のこと、 $N=105$ 」と「老親のこと、 $N=125$ 」、仕事では「職場での役割変化、 $N=159$ 」の回答数が多かったため、これら4つを選択した。しかし、「体力の衰えや

老化」は、後述のパス解析でモデルの適合性が低かったため、最終的に分析から除外した。

悩みごとの各変数の相関係数

分析対象として選択した「子供」「老親」「職場での役割変化」の3つの悩みごとのパス解析に先立ち、各変数の性質を把握するため、基礎統計量として相関行列を算出した。結果をTable 2, 3, 4に示す。いずれの悩みも相互協調的自己観と関与的否定感情、相互独立的自己観と脱関与的肯定感情、脱関与的否定感情と関与的否定感情の間に中程度の有意な正の相関($r = .44 \sim .52, .40 \sim .42, .47 \sim .63$)が見られ、道具的サポートと情緒的サポートの間にも有意に高い正の相関($r = .76 \sim .85$)が見られた。

悩みごとの各変数のパス解析

「子供」「老親」「職場での役割変化」の3つの悩みごとの各変数の因果関係を確認するため、

Table 2 家族—子供の悩みについての相関係数、平均、標準偏差、信頼性

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	平均	SD	α
1. 相互協調的	—	-.30 **	.12	.12	.33 **	.52 **	.24 *	.11	.17	23.26	4.11	.70
2. 相互独立的		—	.42 **	.15	-.37 **	-.25 **	.07	-.19	-.19	31.62	6.32	.84
3. 脱関与的肯定			—	.22 *	-.04	.06	-.07	-.01	.06	5.40	1.38	.59
4. 関与的肯定				—	-.09	-.10	.04	.16	.26 **	10.80	1.79	.76
5. 脱関与的否定					—	.54 **	.01	.19	.21 *	9.75	2.47	.77
6. 関与的否定						—	.28 **	.15	.13	14.26	2.87	.71
7. 心理的負債感							—	-.13	-.24 *	76.56	8.46	.84
8. 道具的サポート								—	.78 **	12.99	3.61	.80
9. 情緒的サポート									—	12.94	3.84	.85

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 3 家族—老親の悩みについての相関係数、平均、標準偏差、信頼性

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	平均	SD	α
1. 相互協調的	—	-.19 *	-.01	-.03	.36 **	.50 **	.34 **	.14	.29 **	22.75	4.59	.77
2. 相互独立的		—	.40 **	.09	-.25 **	-.20 *	-.08	-.10	-.17	32.17	5.18	.77
3. 脱関与的肯定			—	.29 **	-.01	.04	.05	-.05	-.01	5.52	1.34	.55
4. 関与的肯定				—	-.05	.07	.08	.10	.12	10.74	1.71	.64
5. 脱関与的否定					—	.63 **	.03	.04	.18 *	9.54	2.73	.82
6. 関与的否定						—	.24 **	.06	.21 *	13.44	3.21	.80
7. 心理的負債感							—	.15	.18 *	76.78	9.41	.87
8. 道具的サポート								—	.76 **	12.54	3.60	.79
9. 情緒的サポート									—	11.98	3.58	.82

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 4 仕事一役割変化の悩みについての相関係数、平均、標準偏差、信頼性

N=159

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	平均	SD	α
1. 相互協調的	—	-.07	.01	.05	.28 **	.44 **	.11	.10	.15	23.44	4.07	.69
2. 相互独立的		—	.40 **	.12	-.24 **	-.21 **	-.04	-.04	-.09	32.72	5.31	.77
3. 脱関与的肯定			—	.24 **	-.16 *	-.05	.02	.08	.03	5.74	1.38	.61
4. 関与的肯定				—	-.08	.09	.17 *	.14	.22 **	10.74	1.77	.72
5. 脱関与的否定					—	.47 **	-.04	.12	.13	9.73	2.59	.80
6. 関与的否定						—	.19 *	.07	.11	13.86	2.89	.71
7. 心理的負債感							—	-.01	-.03	76.64	9.31	.86
8. 道具的サポート								—	.85 **	12.26	3.40	.77
9. 情緒的サポート									—	12.75	3.57	.83

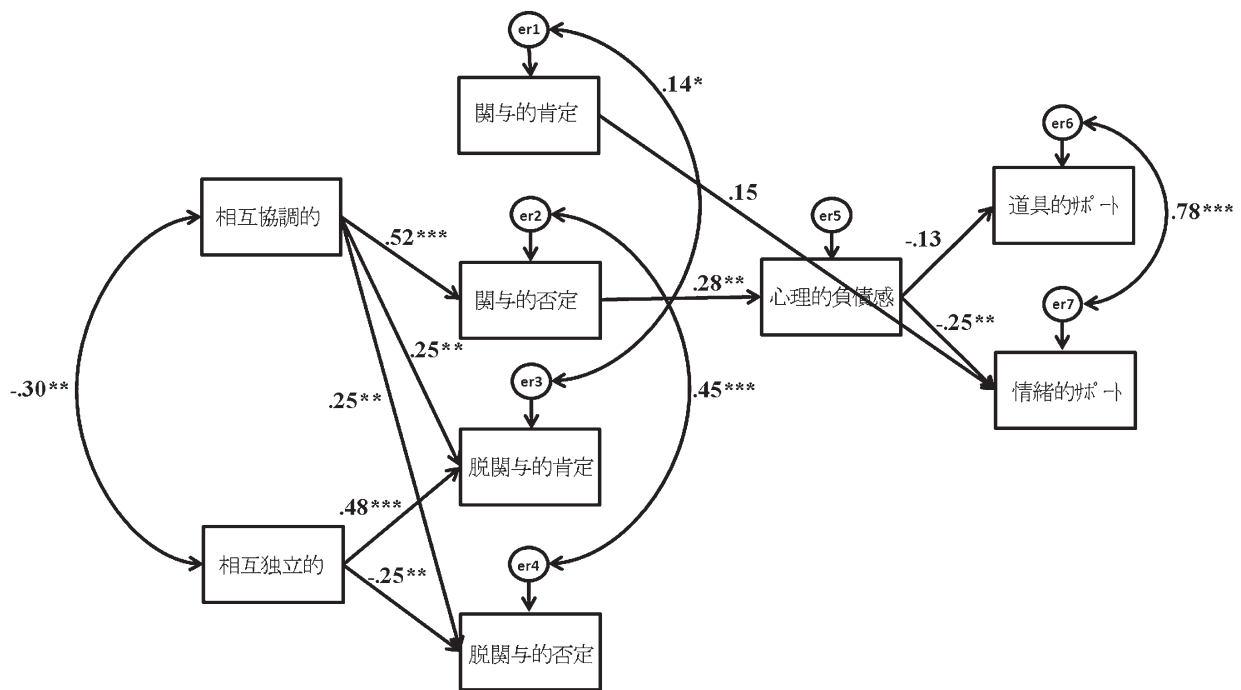
* $p < .05$ ** $p < .01$

Amosでパス解析を行った。

子供の悩みについてのモデルの適合性は、GFI = .924, AGFI = .851, RMSEA = .082を示した (Figure 2)。RMSEAの値は十分とは言えないが、他の指標からある程度高い適合度が得られたと判断した。その結果、相互協調的の自己観が、関与的否定感情の促進要因に (パス係数は.52, $p < .001$)、関与的否定感情は、心理的負債感の促進要因に (.28, $p < .01$)、心理的負債感は、情緒的サポートの抑制要因となっていた (-.25, $p < .01$)。すなわ

ち、相互協調的の自己観、関与的否定感情、心理的負債感、情緒的サポートへとつながる有意な因果関係が認められた。一方、相互独立的の自己観は、脱関与的肯定感情の促進要因となるに留まっていた (.48, $p < .001$)。

さらに、子供の悩みについて男女間で差がないかを確認するため、Amosで多母集団同時分析を行った。モデルの適合性は、GFI = .879, AGFI = .764, RMSEA = .073を示した。その結果、相互協調的の自己観から関与的否定感情への正のパス係数



* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Figure 2 家族一子供の悩みについてのパス解析の結果 (男女込み)

は、女性の方がやや高く（男性：パス係数は.48, $p < .01$, 女性：.55, $p < .001$ ）、関与的否定感情から心理的負債感への正のパス係数も女性の方が高かったが（男性：.11, *n.s.*, 女性：.38, $p < .001$ ）、心理的負債感から情緒的サポートへの負のパス係数は、男性の方が高く（男性：-.33, $p < .05$, 女性：-.15, *n.s.*）、また、心理的負債感から道具的サポートへの負のパス係数も男性の方が高かった（男性：-.30, $p < .10$, 女性：.00, *n.s.*）。パラメータ間の差に対する検定統計量を見たところ、いずれも有意な差は確認できなかった。従って、相互協調的自己観、関与的否定感情、心理的負債感、情緒的サポートへとつながる因果関係には、男女間に有意な差がないことが示された。

老親の悩みについてのモデルの適合性は、GFI = .962, AGFI = .925, RMSEA = .000と十分な値を示した。その結果、相互協調的自己観が、関与的否定感情の促進要因となっていた（パス係数は.50, $p < .001$ ）。しかし、関与的否定感情から心理的負債感には有意なパスは出ず（.10, *n.s.*）、相互協調的自己観から直接心理的負債感に有意なパス（.29, $p < .01$ ）が出ていた。また、相互協調的自己観から情緒的サポートにも有意なパス（.19, $p < .01$ ）が出ていた。しかし、心理的負債感から両サポートへは有意なパスは出ていなかった。従って、相互協調的自己観、関与的否定感情、心理的負債感、情緒的サポートへとつながる有意な因果関係は認められなかった。

職場での役割変化の悩みについてのモデルの適合性は、GFI = .953, AGFI = .913, RMSEA = .057を示した。その結果、相互協調的自己観が、関与的否定感情の促進要因に（パス係数は.44, $p < .001$ ）、関与的否定感情は、心理的負債の促進要因に（.19, $p < .05$ ）なっていた。しかし、心理的負債感から両サポートへ有意な負のパスは出なかった。従って、相互協調的自己観、関与的否定感情、心理的負債感、情緒的サポートへとつながる有意な因果関係は認められなかった。

サポートが役に立った事例のまとめ

健康・家族・仕事の3分野について30代後半以降で経験し、既に解決した悩みの中から、身近な人のサポートが役立った事例について自由記述を求めた結果、89名から回答を得た。内容別に分類

すると、健康上の悩みが21名、家族の悩みが28名、仕事の悩みが20名、その他（異性、お金のこと、サポートの有り難さ全般など）が20名で、家族の悩みをあげる人が多く、中でも、子供の悩みについてサポートを得たことが役に立ったと記述する人が11名と最も多かった。

健康上の悩みについては、「大きな病気になり、友人が何でも話を聞いてくれ支えとなった」「体調の悪い時そっと寄り添ってくれた娘に感謝」など“病気”になった際に受けたサポートをあげている人が多かった。

家族の悩みについては、「老親の介護について同じような状況を持つ友人から介護支援の情報を聞き支援が受けられるようになった」「子供が学校に行かなくなった時に同級生の親に話を聞いてもらった」など“老親”と“子供”の悩みに関して受けたサポートをあげている人が多かった。

仕事の悩みについては、「職場の人間関係に悩んでいた時、夫に話すことで気持ちが楽になった」「職場の人間関係について周りの人が時々相談役をしてくれて助かっている」など“職場の人間関係”の悩みに関して受けたサポートをあげている人が多かった。

その他では、「物事の解決には結びつかなくても話をすることで精神的に楽になる」「人に相談することにより、自分では気づかない視点を得ることができ、非常に有益に感じることがある」など、悩み事全般についてサポートが有益であることなどを述べていた。

考 察

文化と感情とサポート要請

本研究の第1の目的は、中年期において文化的自己観が関係志向性に基づいた脱関与・関与的感情の促進要因となっているかどうかの検討を行うことであった。分析の結果、いずれの悩みの場合も、相互協調的自己観は、関与的否定感情の促進要因として有意であることが示された。つまり、個人は、さまざまな人間関係の一部になることが大切だとする自己観が強いほど、罪悪感、負い目、恥、などの他者との関係志向性が高い否定感情が強くなる傾向が示された。従って、「相互協調的自己観が高いほど、関与的否定感情が高い

(仮説1)」は支持された。

第2の研究目的として、文化によってもたらされた感情が被援助場面での心理的負債感の促進要因となっているかどうかの検討については、分析の結果、子供の悩みについてのみ、相互協調的自己観によってもたらされた関与的否定感情が心理的負債感の促進要因として有意であることが示され (Figure 2)、また、関与的否定感情以外の感情は、心理的負債感の促進要因とはならないことが示された。つまり、罪悪感、負い目、恥、などの感情が強い人が子供についての悩みを抱えると、サポート要請行動を取ろうとする際、心理的負債感を促進させてしまう傾向があることが明らかとなった。それ以外の、老親の悩みや職場での役割変化の悩みについては、関与的否定感情が心理的負債感の促進要因とはならなかった。従って、「関与的否定感情が高いほど、被援助場面における心理的負債感が高くなる (仮説2)」は、子供の悩みについてのみ支持された。

第3の研究目的である心理的負債感がサポート要請の抑制要因となっているかどうかの検討については、分析の結果、子供の悩みについてのみ心理的負債感が情緒的サポート要請の抑制要因として有意であることが示された (Figure 2)。つまり、被援助場面での心理的負債感の強い人が子供についての悩みを抱えると、情緒的サポート要請を抑制することが明らかとなった。従って、「被援助場面における心理的負債感が高いほど、サポート要請傾向は低くなる (仮説3)」は、子供の悩みについてのみ情緒的サポートが抑制されることが支持された。

悩みの種類とサポート要請のメカニズム

本研究では、子供の悩みについてのみ、文化的自己観を端緒とする情緒的サポート要請の抑制へとつながる因果関係が認められ、仮説モデルは条件を限定して支持された。このことから、中年期においては、相互協調的自己観がもたらす関与的否定感情がサポート要請を一様に抑制するのではなく、悩みのテーマごとに文化的自己観からサポート要請抑制へと向かうメカニズムが違うことが示唆される。

子供についての悩みは、親である夫婦が当事者となるため、サポート要請対象はその多くが家族

外の他者に想定される。サポートが役に立った事例の自由記述でも、配偶者のいる人が子供の悩みがある場合は、「友人に相談することで具体的な事と気持ちと両方が落ち着いた」など、全ての人が友人・知人をサポート要請対象にあげていた。親しい間柄と言えども、子供の悩みについて他者にサポートを要請する行動は、気兼ね、負い目、わだかまりなどの関与的否定感情をより喚起しやすいと言えるだろう。

また、道徳的規範という観点で子供の問題を見ると、親の責任という社会的通念の強い日本では、親が自力で問題解決しようとする意識が強い。これは相互協調的自己観の日本の形態の特徴としてあげられている役割志向 (北山,1998) と深く関係していると考えられる。周りから期待された役割を果たそうとすることは、そこにある関係性に積極的に関与しようとする意思表示であり、相互協調的自己観の中心的概念とも言える。また、子供の問題は、Erikson (1982 村瀬他訳 1989) が主張した中年期の課題である「生殖性」、そして、岡本 (1996) が中年期の重要な問題として指摘した「他者の存在に責任を持つ」ということにも合致し、親であることの責任は、中年期の最も重要な課題であると言える。それだけに一層役割志向が強くと考えられ、子供の問題で他者にサポート要請をすることは、親としての役割を果たせないことに罪悪感や恥などの関与的否定感情を喚起させると言えるだろう。

さらに、問題の主体という観点で子供の問題を見ると、健康や仕事の問題と違い、問題の主体は被援助者自身ではなく子供であるため、別人格としての子供が持っているプライバシーや子供に烙印を押されることへの懸念が生じると考えられる。自由記述でも、「子供の不登校やいじめなど深刻な悩みは誰かれなく打ち明けられないので、一人で抱え込みがち」と述べるなど、他者に開示することが子供のプライバシーを傷つけてしまうかも知れないことや将来のある子供に烙印を押されてしまうかもしれないという罪悪感を伴わせることを示唆している。

自由記述から見える中高年にとって役に立つサポート

本研究においては、子供の悩みについて、相互

協調的自己観がもたらす関与的否定感情が情緒的サポートを抑制させることを明らかにした一方で、自由記述では子供の悩みについて情緒的および道具的サポートを得たことが役に立ったと記述する人が11名と最も多く、子供の悩みに関して周囲のサポートが有益であることを多くの人が評価していたことも確認した。子供の悩みを解決する上で、親しい他者からのサポートは有り難いものと感じているにもかかわらず、現実には心理的負債感を抱いて要請することを躊躇してしまっているという皮肉な結果が示されたのである。このように、実行されれば最も役に立つはずの親しい他者からのサポートが、逆に最も抑制される傾向にあるというギャップの中に中高年の苦悩の大きさがあると言えるだろう。

また、今後のソーシャル・サポートの活用を検討する上で、以下のような興味深い示唆が得られた。まず、病気や老化の悩みでは、「同じ病気で悩んでいる友だちに本音で話すことが出来、気が楽になった」「体力や気力の衰えを感じた時、人の意見等を聞くことにより自分だけではないという安心感を得た」などや、老親や子供の悩みでは、「親の介護の悩みで既に経験している友人から助言をもらって助かった」「青年期の特徴として自分の子供だけでなく多くの場合がそうであると言ってもらえた時、ほっとした」など、“同じような経験”をした親しい他者と話をしたことをあげている回答が多かった。経験者の話は、悩みを乗り越えた体験からくる生のアドバイスという道具的サポートを得ると同時に、経験者の存在そのものが“自分だけではない”“同じ気持ちを分かってもらえる”という共感を得られる情緒的サポートとして機能していると考えられる。このように健康や家族の悩みは、経験者に話すことで道具的および情緒的の両方のサポートを同時に得ていることが示唆された。他方、仕事の悩みについては、「仕事のことで、家族に話を聞いてもらうだけでストレス発散につながる」「仕事で分からないことは、周りの人の助言を求め助けてもらっている」など、家族にはただ聞いてもらうといった情緒的サポートを求め、職場などの周囲の他者には具体的な協力やアドバイスなど道具的サポートを求める記述が目立ち、求めるサポートによって対象者を変えていることがうかがえた。

今後の課題

第1に本研究では、中年期において、特に子供の悩みを抱えた際に文化がもたらす否定的感情がサポート要請を抑制することが確認され、特にサポートの中でも情緒的サポートを抑制することが示された。しかし、道具的サポートはパス係数が男女で相殺された可能性があることや、男性の方が両サポート要請の負のパス係数が高いなど、男女差がある可能性も示唆された。男性のデータ数が十分確保出来なかったため明確な有意差は得られなかったが、再度検討を行う必要がある。第2に、今回の調査対象者は既婚者が89.9%を占めたため、独身者の悩みについてはほとんど研究できなかった。同じ中高年と言っても独身者の悩みの内容は変わってくるものと考えられ、むしろ、既婚者より家族内のサポート源が少なくなる分ソーシャル・サポートも活用しにくくなるという深刻さが増すと言える。中高年の独身者が今後ますます増えていくと予測される現代社会では、そのような人達を対象とした検討も必要だろう。第3に、今後のソーシャル・サポートの効果的活用を考えていくためには、本研究のようなサポート要請の抑制要因だけではなく、促進要因に焦点を当てた研究も必要であると考えられる。どのような種類の悩みなのか、サポート源が誰なのか、どのような種類のサポートなのか、それらの促進要因の関係を一層力動的に見ていく必要があるだろう。第4に、本研究では、ソーシャル・サポートを是として検討を進めてきたが、被援助者に否定的な影響を与える面（例：自分で解決出来ることも人に頼ってしまうなど、依存心が強くなる可能性）も検討する必要がある。これらの視点を加えて、ソーシャル・サポートについて一層の研究を重ね、臨床現場で実践できる効果的な活用を引き続き考えていきたい。

引用文献

- 相川 充・吉森 護 (1995). 心理的負債感尺度の作成の試み. 社会心理学研究, 11, 63-72.
- 相川 充 (1984). 援助者に対する被援助者の評価に及ぼす返報の効果. 心理学研究, 55, 8-14.
- 有光興記・菊池章夫 (2009). 自己意識的感情の

- 心理学. 北大路書房.
- 東 洋 (1994). 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて. 東京大学出版会.
- Benedict, R. (1967). *The chrysanthemum and the sword : patterns of Japanese culture*. Boston: Houghton Mifflin Co. (ベネディクト, R. 長谷川松治 (訳) (1967). 菊と刀. 社会思想社)
- Caplan, G. (1974). *Support Systems and Community Mental Health*. New York: Behavioral Publications. (近藤喬一・増野肇・宮田洋三 (訳) (1979). 地域ぐるみの精神衛生. 星和書店)
- Cassel, J. (1974). Psychosocial process and “stress”: Theoretical formulations. *International Journal of Health Service*, 4, 471-482.
- Cobb, S. (1976). Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, 38, 300-314.
- Erikson, E. H. (1982). *The Life Cycle Completed*. New York: Norton. (村瀬孝雄, 近藤邦夫 (訳) (1989). ライフサイクル, その完結. みすず書房)
- Greenberg, M. S. (1980). A theory of indebtedness. In Gergen, K. J., Greenberg, M. S., & Willis (Eds.), *Social exchange: Advances in theory and research*. New York: Plenum Press, pp3-26.
- 箱井英寿・高木 修 (1987). 援助規範意識の性別、年代、および、世代間の比較. 社会心理学研究, 3, 39-47.
- 橋本 剛・今田俊恵・北山 忍 (2007). 日米における援助要請傾向—日常的援助と専門的援助の両側面から—. 日本心理学会第71回大会発表論文集, 74.
- 一言英文・新谷 優・松見淳子 (2008). 自己の利益と他者のコスト—心理的負債の日米間比較研究. 感情心理学研究, 16, 3-24.
- Jung, C.G. (1916/1946). *Über Psychologie des Unbewussten*. Zürich. (ユング, C. 高橋義孝 (訳) (1977). 無意識の心理. 人文書院)
- Kim, H. S., Sherman, D. K., & Taylor, S. E. (2008). Culture and social support. *American Psychologist*, 63, 518-526.
- 北山 忍 (1998). 自己と感情—文化心理学による問いかけ. 共立出版
- 北山 忍 (2007). 自己と文化. 日本衛生学雑誌, 62, 115-117.
- 北山 忍・唐澤真弓 (1995). 自己：文化心理学的視座. 実験社会心理学研究, 35, 133-163.
- Kitayama, S., & Markus H. S. (1991). Culture and the self: implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Kitayama, S., Markus, H. R., & Kurokawa, M. (2000). Culture, emotion, and well-being: good feelings in Japan and the United States. *Cognition and Emotion*, 14, 93-124.
- Kitayama, S., Markus H. R., & Matsumoto, H. (1995). Culture, self, and emotion: A cultural perspective on ‘self-conscious’ emotions. In Tangney, J. P., & Fischer, K. W. (Ed.), *Self-conscious emotions: The psychology of shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press, pp. 439-464.
- Kitayama, S., Mesquita B., & Karasawa, M. (2006). Cultural affordances and emotional experience: Socially engaging and disengaging emotions in Japan and the United States. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 890-903.
- 岡本祐子 (1996). 中年期女性の危機と発達—アイデンティティの揺らぎと再確立. 教育と医学, 44, 901-907.
- 岡本祐子 (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程. ミネルヴァ書房.
- 岡本祐子 (2005). 成人期の危機と心理臨床—壮年期に灯る危険信号とその援助—. ゆまに書房.
- 坂田成輝 (1989). 心理的ストレスに関する一研究—コーピング尺度 (SCS) の作成の試み—. 早稲田大学教育学部学術研究 (教育・社会教育・教育心理・体育学編), 38, 61-72.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 (1996). 相互独立的一相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成. 奈良大学社会学部大学院社会学研究科, 24, 157-173.
- 高橋祥友 (2000). 中年期のこころの危機. 日本放送出版協会.
- Taylor, S. E., Sherman, D. K., Kim, H. S., Jarcho, J., Takagi, K., & Dunagan, M. S. (2004). Culture and social support: Who seeks it and why?

Journal of Personality and Social Psychology, 87,
354-362.

うぶかた あつこ (昭和女子大学大学院心理学専攻平成24年度修了生)
いまじょう しゅうぞう (昭和女子大学大学院生活機構研究科)

